

54 折目付け効果の新しい測定法

新潟大学高田分校 ○山崎 敏子
お茶の水女子大学 松川 哲哉

目的 被服学における研究上では、アイロン掛け等による折目付けの効果または折目の持続性を測定したい場合が多く、防皺度測定法に準じてこれを行っている。例：松川・金原，家学，4，244（1953）。しかし標準の防皺度測定法はすべて引掛け法により，しかも試料が小型であって実験にはかなりの技術を要して困難である。松川はこの点を考え，大型の試料による平置式開角度法を提案した。この方法の最大の短所とみられる，開角90度を境にして試験布の重量が全く逆方向に作用すること，並びに慣用の標準法に比べての再現性や精度を検討するために，本実験を行った。

実験方法 平置法の試料の大きさは差当り2×8cmとし，一端から2cmの所を折目として，ここに分銅またはアイロンによる荷重を掛け，除重後に短片の開く角度を測定する。標準法として比較の対象としたものは，輸出スフ織物規格の防皺度測定法（JIS L 1511）である。

実験結果 分銅荷重の場合，500gでも1kgでも大差はない。開角度 >90 度のときには標準法よりも大きな数値を示すが，試料の重量の影響は割合に小さい。各実験において誤差項を比較すると，一般に標準法と同程度かむしろ平置法のほうが小さく，ことに糸の太い場合や弾性に富む試料では精度が高い。